



『紅葉の旭岳』

秋から冬に移り変わる旭岳の紅葉の姿は、尾根から山裾、お花畑へと絵具を流し込んだように、ウラジロナナカマドの赤や黄、チングルマの綿毛の白とのコントラストが美しく、旭岳紅葉を描きたい一心で筆をとりました。第2回目の作品として投稿させていただきます。

ふるさと上田の紅葉と言えば、角間溪谷や城址のケヤキ並木が有名ですが、また、校歌にも謳われる“秋玲瓏の太郎の嶺”もきっと紅葉していたはずでしょうが記憶の遠くにあります。一方、旭岳のそれは北国の高山に位置するところから雄大でありかつ鮮やかさが際立っていると感じます。会員の皆さんも趣味の絵・風景写真等を投稿し合いませんか。

(63期 沓掛高夫)

◆六文銭の旗の下に 16 名が集う！

～ 2017 年度観楓会の報告 ～

恒例となった 2017 年度の観楓会は、昨年 11 月 16 日に、会員 16 名が参加して札幌市内のイタリア料理店イル・ネージュで開催されました。今回は、菅沼さん（48 期）・中曽根さん（51 期）・平尾さん（51 期）・矢嶋さん（59 期）の諸先輩をはじめ、石黒さん（76 期）・白石さん（90 期）が忙中を押して参加され、岩見沢から西澤さん（68 期）も六文銭の旗を持って駆け付け、久々に賑やかな会合となりました。

観楓会では楽しく飲んで、美味しいものを食べるのは勿論ですが、毎回、近況報告として参加者に 3 分間スピーチをお願いしています。勿論、3 分では止まらず、司会を悩ます場合が多々ありますが、ご愛嬌です。今回のスピーチの一端を紹介します。

菅沼さんが、住んでいる江別市の高校生の留学支援事業で米国の姉妹都市グレシャム市に行ってきたばかりであることを話すと、同じ江別に住む白石さんが、同じく江別市の姉妹都市になっている高知県土佐市を訪れ、土着の長曾我部氏と関ヶ原以降を治めた山内氏それぞれに対する地元民の思いを比較して語ってくれました。

金井さん（94 期）のお兄さんが甲子園出場時のピッチャー（控え）であり、最後に剛速球を投げたらしいと評判でした。

矢島さん（67 期）は知床の皆伐地の森林復興を手掛けて 30 年になること。また、西澤さんはシラカンバ花粉の研究がもう直ぐ 10 年の区切りを迎えると話してくれました。

いずれについても別の機会にもう少し詳しく聴いてみたいものです。石黒さんは仕事が忙しく疲れ気味で参加したが、みんなの話を聞いてまだまだガンバレルと思ったと明るく話していました。

案の定、話は尽きませんでした。酔いが程よく回ったところで、全員で校歌を斉唱して名残惜しい会を閉じました。今年も開催しますので、残念ながら参加が叶わなかった方々も次はお待ちしています。



<2017 観楓会参加者（左から・敬称略）>

後列：沓掛(63 期)、杉山(66 期)、石黒(76 期)、金井(94 期)、矢嶋(59 期)、西澤(68 期)、清澤(64 期)、矢島(67 期)、大谷(65 期)

前列：福田(64 期)、白石(90 期)、中曽根(51 期)、菅沼(48 期)、平尾(51 期)、北澤(73 期) なお、中村さん(65 期)は中途退席した。

ことのついでに、毎回お世話になっている会場・「イル・ネージュ」を紹介
 します。大谷さん（65期）が懇意にしているお店で、場所は北12条に
 あり、通りに面するカウンター席と部屋の中央に大きなテーブル2つ
 を配する20名ほどが入るこじんまりとしたイタリア料理店です。われ
 われの観楓会ではいつも貸切にして使わせていただいています。オーナ
 ーの若夫婦含め3人ほどで切り盛りしていて、パスタやピザ、新鮮な野
 菜、そしてワインを美味しくいただいています。近くにお出掛けの際はドア
 を押してみてください。上田高校同窓生ですと言
 えば、もしかすると（？）サービスしてくれるかもしれません。

（記・64期清澤）



会員による 誌上講演

3回目の今回は、51期・平尾さんに登場していただきました。平尾さんは長年、
 大学で教鞭をとってききましたが、その経験を踏まえて、今日の大学教育の問題点、
 あるべき姿の一端を語っていただきました。

これでよいのか日本の大学教育

51期 平尾三郎 さん
 （札幌大学名誉教授）



1. 「誰かである人」

上田市のはずれに龍洞院という寺院があり、その墓地の一面に「平尾家
 代々の墓」があります。私の父が昭和の初期に、先祖個人個人の名前が刻
 まれて散在していた墓石を集めて、それらの墓石の中心にひときわ大きい
 「平尾家代々の墓」という墓標を立てたようです。その集められた墓石の
 中の末席（石）にひっそりと何の文字も刻まれていない単なる石ころ、い
 わば名無しの権兵衛の墓があります。

どうしてこんな話から始めたのか怪訝に思われたでしょう。山崎正和と
 いう著名な劇作家、評論家が以下のようなことを指摘しています。前産業
 化の時代の大多数の人間は、物質的欲求の充足のためには「誰でもない人」
 で不満をもたなかつたし、産業化の時代に入っても画一的な「誰でもよ
 い人」で満足していたが、物質的欲求がほぼ満たされた今、多くの人間は

「誰かである人」として自己主張を始めていると。つまり名無しの権兵衛でいたくはなくなったというの
 です。

最近の若者と接していると、この山崎正和氏の指摘は正鵠を射ているように思われます。良きにつけ悪
 しきにつけとにかく目立ちたがりやです。目立つために時には犯罪を含めて異常な行動に走る者すら出て
 きます。問題は、多くの若者たちは自分が誰なのか、誰になりたいのか、誰になれるのかについて、すな

わち、どういう人生を送りたいのか、送れるのかについて、まったくと言ってよいほど五里霧中の中にいることです。

2. 教育者の劣化

そうは言っても、私を含めて、日本人の大多数の成人もあまり立派なこととは言えないようです。最近の政治家、経営者の醜態は言うに及ばず、ジャーナリスト、専門家そして何よりも教育者の劣化は目に余ります。教員であった私自身を顧みて言っているのですから間違いありません。困ったことに、全ての日本人は教育者によって影響を受けるため教育者の劣化は由々しき問題です。とくにその教育者養成の役割が主として大学にある日本では、教育はいかにあるべきか、教育の目的は何か、今日の学生は何を求めているのか、大学はそれに応えられる場となっているのかを、日常的、組織的に問われなければならないのに、ほとんどの大学はそうになっていません。何をもちえてそう断言できるのか、その根拠、そして大学をどう改革すべきと私が考えているかと話を進めたいと思いますが、その前に日本の大学制度の歴史を簡単に見てみます。

3. 日本の大学の変遷

a. 戦前の大学

日本の場合、急速な近代化を迫られた国家は「大学は国家に須要なる学術の理論及び応用を教授し並びにその蘊奥を攷求するを以て目的とし兼ねて人格の陶冶及び国家思想の涵養に留意すべきものとす」（大正7年「大学令」仮名遣い変更）と大学を位置づけて、国家のために貢献する大学及びその卒業生に多大な期待をかけ、大学の発展に物心両面の援助を惜しまなかったのです。法学部出身者は政官界で、経済学部出身者は経済界で、理工学部出身者は産業界で、医学部出身者は医療の世界で、そして各学部の中から適任者は研究教育の世界で、それぞれを職業とし指導者として活躍することが期待されていたから、大学は専門教育（＝職業教育？）を行っていればそれで許されました。日本の大学の学部構成、学部名にしても、学問体系に基づきながらも、学部が設置された順序、設置された目的などを見ると、同時に職業教育を念頭においてもいたと思われる

b. 敗戦後の大学改革

しかし第2次大戦の敗戦によって大学は大きな変化を見せます。アメリカ占領軍、少なくともその一部は、国家による、官僚による教育支配を消滅させようとし、教育者による自主的な運営を求めてきました。また日本の教育者の中からも、無謀な戦争に走った国家の暴挙に抵抗できなかった反省から、大学教育を見直そうという意見が出てきました。一橋大学の教授であった上原専禄氏は次のように説きました。

「日本の将来に対して希望をつなぐことのできる途を求めるとすれば、それは全く新たなる精神性格の日本人を創造するという極めて困難な一路のほかにはありえないのではなかろうか。この一路とは、通常『教育』の名を以て称せられているところのものに外ならぬのであるが、この一路によって世界の全体において自己を意識し、人類の歴史において自己を思考し、新たなる価値を受け入れるに敏であってしかも外物に追従することをしない真に自由な日本人を創り上げ、その人たちを日本の将来の担い手とする方法以外には、わが国の未来に希望をつなぎうる道は存しないのではなかろうか。（アンダーラインは平尾）」さて上原氏のいう「真に自由な日本人」は、どれだけ現存しているのでしょうか。日本の将来の担い手がど

れだけ育っているのでしょうか。今は亡き上原氏は、今日の日本を見て、どこで間違えたと思っているのでしょうか。

c. 広い知識の修得

昭和の時代に大学で学んできた方はご存じでしょうが、平成3年に大学設置基準が改訂されるまで、学生は一般教育科目を受講してかなり多くの単位を修得しなければ卒業できないことになっていました。一般教育科目等を専門科目と同等に重視し、多くの大学は一般教育科目担当者の組織として教養部を設置しました。1年2年生に対して主として一般教育を、3,4年生に対して専門教育を行うことにしたのですが、その趣旨について、大学基準協会が出した報告書に次のように述べられています。「在来の、専門技術の研究と教授に重点を置き、最初から専門領域に分化して、いわば狭く深く進まんことにのみ主力を注ぎ、個人の自由と尊厳にねぞす豊かな教養と生きた知性を身につけ、自主独立の識見ある人物の養成に意を用いなかった。つまり在来の大学は、教育の面ではもっぱら専門教育ないし職業教育を重視して、いわゆる一般教育の部分を閑却したのである（アンダーラインは平尾）」…

d. 専門教育と一般教育の違い

一般教育の理念としてはわからないではありませんが、実際に文部省の規制下でおこなわれた一般教育のカリキュラムを見ると、人文科学、自然科学、社会科学の3系列、3分野に分けられた学科目のなかから学生は均等に選択するように定められていました。大学基準協会は「かようにして学生は広い分野の知識を自分自身に総合して、物事をあらゆる観点から科学的、合理的に思考して正しい認識判断をなす訓練をなし、また感情の陶冶によって精錬された美的情操を豊富にして人生を美しいものにする習慣を養うための教育（アンダーラインは平尾）」が実施されると安易に述べていますが、現実はその甘いものではありませんでした。当時の大学設置基準において例示されている一般教育の授業科目名を見ると、法学、経済学、物理学、化学、美術、音楽等、専門科目とまぎらわしいもの、高校までの教育とダブるものが入っていました。これらの科目名での授業担当教員の多くは、一般教育の理念に沿った授業内容方法を考え工夫することなく、自分が大学で受けてきた専門教育の内容方法をそのまま一般教育に持ち込もうとしました。学生は広い知識を「自ら総合する」術を未だほとんど持っていませんから、このような授業を一般教育的観点から咀嚼することができず、とまどうばかりでした。

私が大学の教員として採用されたのは1968年で、しかも一般教育に携わる教員組織である教養部に配属され、文部省が一般教育科目、その中の社会科学系列の一つとして例示していた「政治学」という授業科目を担当することになりました。教養部で一般教育の授業を担当することになって、専門教育として開設される「政治学」と目的・内容・方法とどう異なるのか考えざるを得なくなります。赴任直後、その疑問を、その後教養部長、学長を務められることになるある教養部の教員にぶつけました。「どうぞお好きなように」という答えを今でも忘れられないでいます。

後でわかりましたが、このような一般教育についてのあいまいさは、全国多くの大学で見られたものでした。大学設置基準で決められているからしようがなくやっている、こんなわけのわからぬ一般教育を強制的に受けさせられる学生にとっては、まったく迷惑な話です。

e. 大学設置基準の「大綱化」

ところが平成3年、大学設置基準が「大綱化」され、多くの規制が外されることになりました。肝心なところだけを紹介しますが、専門科目、一般教育科目、外国語科目、体育科目という区分が廃止され、したがって科目ごとに定められた卒業要件もなくなりました。各大学はこの大綱化によって色めきたち様々な「改革」にとりくみます。いちばん、目についたのは一般教育科目がなくてもよくなったことです。専門教育と同等に重視され、1, 2年は主として一般教育科目を履修することになっていたため、専門教育は3, 4年でしか履修できず、十分な教育ができないという不満を持っていた専門科目教員、教養部に所属しながら一般教育科目のなりたちや理念、内容、方法について深く考えず、中には専門科目教員より格下意識を持っていた教員も含めて、専門教育重視の改革に多くの大学が走りました。

4. 「誰かである人」の発見を

しかし、一般教育の理念、一般教育という言葉がなくなって最近では教養教育というようになりましたが、その重要性を理解している大学人はたくさんいます。問題はそれらの人々が中心となって、大学全体が組織として教養教育に取り組んで成功している例がすくないことです。長くなってしまいました。実は、大学におけるあるべき教養教育＝人間教育についての私見を披歴して批判を仰ごうと考えていましたが、このへんでやめます。

自分が誰で、誰になりたいか、誰になれるのかに思い悩んでいる多くの学生に対して、大学が提供できるのはかつての一般教育、現在いわれている教養教育であり、専門教育重視の大学に回帰してはなりません。だからといって、広い知識を修得させようとして多数の教員が多数の授業科目を開講すればよいということでもありません。くりかえしますが、学生が、自分自身がどういう存在であると自覚し、どういう存在になりたいか考え、そういう存在にどうすればなれるのかを発見させることを目的として、専門のいかに問わず教員が学生と向き合うことが教養教育の神髄であることと私は思います。

(了)

◆皆さんこんにちは！！同窓生からの近況報告

自己紹介と近況報告

90期 渡辺（旧姓：宮原）由実 さん



大学進学と同時に北海道へ来て20数年・・・、もうこちらで過ごした年月の方が長くなってしまいました。

1992年に高校を卒業し、一年間の予備校生活を経て記念受験のつもりで受けた北大理Ⅲ系（生物系）にまさかの合格、半信半疑で札幌での私の北海道生活が始まりました。3月末に越してきた時はまだ雪がたくさん残っており、4月になっても天気が悪い日は吹雪いたり、さすがは北海道だなあと実感したのを覚えています。山に囲まれた長野県（上田市古安曾）で生まれ育ったせいか、漠然と北海道の広大な自然に憧れていたのですが、いざやっ来て

てみると札幌は結構な都会でしたので、驚きとともに慣れるまで少し大変でした（私が知らなかっただけです…笑）。しかし一歩北大構内に入ると、広々とした農場があったり、ポプラやエルムの大木が立ち並んでいたり、うっそうとした原始林まで残っており、まさに北海道の大学といった感じで、自然豊かな環境で学生時代を満喫することができました。

そして入学後たまたまクラスの友だちに誘われて顔を出したサークルが『自然保護研究会』。高校まで体育会系の部活動（剣道）しかしてこなかった私にとっては大冒険でしたが、野外調査活動がメインとのことで、いろいろな所に行けそう！という期待を胸に思い切って飛び込みました。大学院生の先輩方もたくさんいて、本格的な調査活動（主に植物）や学会発表など大変でしたがとても勉強になりました。週末には近場の山や緑地、長い休みには大雪や知床の山に入っただけの調査活動はとても貴重な体験でした。特に山中での調査は数日間テント生活で、時にはヒグマやエゾシカといった野生動物の気配も感じながらの生活です。夏休み中の9月とはいえ夜は冷え込みが強い日もあり、夜中に寒くて何度も目を覚ましたこともあります。身の丈より高いササ藪をこいで歩いたり、沢の石を飛び越えて渡ったり、急な斜面をよじ登ったり…、そうして進んだ先に待っていたトドマツやエゾマツ、ミズナラの原生林は、本当に神秘的で悠久の時を感じさせてくれました。幸いヒグマに遭遇することもなく毎回無事生還できましたが、自然の厳しさ、美しさといったものを肌で感じることができました。

その頃の北大はまだ学部移行制で学部の講座に所属するのは3年生からでしたので、教養時代はわりと自由に好きなことができていたような気がします（成績を気にしなければ…）。もともと動物が好きで獣医になれたらなあという淡い夢もあって理Ⅲを選んだのですが、獣医学部はなかなかの人気で成績優秀な人しか入れない様子でしたし、その頃の私は野生動物の生態への関心が高くなっていたこともあり、当時キタキツネやアライグマなどの研究をしていた文学部の行動科学科（現：人間システム科学コース）に進み、動物行動学を学びました。当時講座では実験用と称して犬やアライグマを飼っており、交代で餌をあげたり散歩させたりしていたのが懐かしいです。卒論では自分でもフィールドワークを試みたく、1ヶ月ほど洞爺湖中島にこもってエゾシカの行動調査をしましたが、残念ながら大学院に進んでまで続けていく自信を持てずそのまま大学を卒業しました。

大学在学中は好きなことやりたいことに没頭し（就職活動もしていなかった）、卒業してからはさで大変です。幸い父からはこちらの技術系の専門学校へ通うということで2年間の猶予をもらったものの、飲食店でアルバイトをしながらの苦しい生活でした。1年が過ぎた頃から本腰で就職を考えてハローワークに通い、何とか法律事務所の事務員の職を得ることができました。弁護士一人の個人事務所でしたが、交通事故や医療事故、離婚などの民事訴訟から債権の取立て、会社・個人の破産処理まで手広く仕事をしており、事務員2人で毎日朝から晩まで書類の作成や提出、電話対応に追われていました。時には事件の相手方の男性が事務所に怒鳴り込んで来たこともあり、怖い世界だなあと身震いしたこともありました。

そして2年近く経ったころ、大学時代サークルでお世話になった先輩方が会社を立ち上げるというのではないですか。事務をやってくれるならとお誘いを受けたのが2000年、会社設立手続きの手伝いから始まり今年でなんとか18年目を迎えます。さっぽろ自然調査館という総勢5名の小さな会社ですが、最近では省庁から環境調査などの業務を直接受託できるようになりました。また、植物や昆虫・魚などの封入標本を制作したり、『北海道フラワーソン』や『さっぽろ生き物さがし』などの市民調査業務も請け負っている、どこかでお耳にされたことがあるかもしれないですね(?) 何かの機会がございましたらどうぞよろしくお願ひ致します。

会社が起動に乗り始めた 2003 年、会社の代表の渡辺と結婚後は(実は学生時代からのお付き合い・・・)、微力ながら会社の仕事を手伝いながらの子育て(現在 13 歳・7 歳・3 歳)に奮闘中です。親兄弟と遠く離れての子育ては大変なことも多々ありますが、会社の方々に迷惑をかけながら何とかやっています…。下の子が小さいのでまだまだ先は長いですが、楽しみながらがんばっていきたいと思います。

長野から憧れの北の大地へ

108 期 中村 光 さん



108 期卒業の中村光と申します。出身は上田市の芳田、豊殿小学校の近くになります。小さな頃は毎日のように学校の裏にある山や森の中に探検しに行った記憶があります。また中学校は第五中学校出身になります。この頃から市のスポーツ少年団に所属し、硬式テニスを始めました。この中学生時代に読んだ動物のお医者さんという漫画がきっかけで本格的に小学生時代に考えていた獣医師という職業を夢にして頑張りました。そして塾や学校の先生、少年団の先輩方の勧めや昔からの憧れもあり上田高校に入学しました。

こうして今から四年前の 2014 年に奇跡的に酪農学園大学の獣医学科に入学することができ、こうして憧れの北の大地を踏みしめることができました。

小学生の頃からの獣医学部に入ることを夢に見て、上田高校生時代も頑張ってお勉強に励んでおりましたが、現実には厳しく高校卒業後も 4 年間浪人をしておりました。4 年目には、父親に呆れられ後に引けなくなった状況で獣医学科の一次試験には不合格、獣医学部とは関係のない新潟県の某大学に合格し、春からそちらに通う予定でした。しかし新潟県に引っ越しをする直前で酪農学園大学の方から追加合格の吉報をいただき、こうして憧れの獣医学科に入学することができました。

上田高校生時代は硬式テニス部に所属し厳しい先生の指導の下、仲間達と切磋琢磨し合って過ごしておりました。特に目立った成績を残せた訳ではありませんでしたが、多くの事を学ぶことができました。その中で今でも大切にしていることが「決して諦めないことと、継続した努力は自分の宝になる」ということです。

大学では様々な地方の人達と友人になることができ、様々な価値観に触れること、いろいろな経験をすることで人間的にも成長することができました。また、本同窓会には酪農学園大学の教授である北澤多喜雄先生とのご縁で参加させていただきました。これまでに苦勞することや厳しい事もたくさんありました。しかし一つずつ、一歩ずつゆっくりではありますが歩み進め、こうして四年生になることができました。四年生では、ゼミの所属が決まり自分は獣医衛生学ユニットに所属になりました。ゼミの活動はまだまだ不慣れな私ですが、これから多くの事を経験して学んで行きたいと思っております。

この学校で過ごす時間ももう僅かになりましたが、大学生時代にしか出来ない多くの事を経験していきたくて考えております。

◆特別企画 高校時代のクラブ活動（班）の思い出

○中曽根公（51期）

二年の時、長野市で長野県少年柔道大会が行われ、上田松尾は団体戦の一回戦で飯田長姫に敗れましたが、個人戦では一年上の芹沢さんが二位、山内さんが三位でした。私は団体戦中堅で引分けでした。三年の春、小諸で東信少年柔道大会があり、個人戦のみで、私が決勝で蚕業の柳沢選手に勝ち優勝しました。夏の総体（当時はそうは呼んでいなかった）の東信予選では丸子実業に完敗いたしました。一年下には箱山君、矢島君という英才が居り、もう一人鍛えれば丸子実業に勝てるのではないかと考え、十二月まで稽古を続けました。

○平尾三郎（51期）

信濃毎日新聞が昭和55年10月25日号で「上中・上高80周年記念」の特集記事をまとめました。その中に「OBの思い出集」という部分があり、そこに私の「生徒会と戦後民主主義」と題する文章がありますので、それを以て編集者の要望にこたえたいと思います。

私が生徒会長を務めたのは昭和26年の後期のことで、記憶も薄れがちです。当時長期休暇の前に学校側からいくつかの生活指導上の禁止事項が示されていました。私はこの種の規制は学校側から出されるよりも、生徒側で自主的に定めるのが望ましいではないかという趣旨で、生徒総会に「申し合わせ」という名称の自主的規制案を提案しました。大変灼熱した議論が展開され、結果はこの種の規制は全く必要なしということになり、提案した責任者としての私の面目は丸つぶれになりました。私にとっては戦後民主主義を考える際に何となく思い出される大きな経験でした。なおその後学校からの規制も出されることはなく、心配されたような事件も起こりませんでした。

○清澤通俊（64期）

3年間を通して新聞班に所属していた。なにしろ小学6年生の卒業文集で将来の夢は海外特派員と書き、中学校でも生徒会の新聞発行に携わるなど憧れの的だったから。高校のグラウンド側の4軒長屋の一面にあった木造の掘っ立て小屋の様な部室に入りびたり、朝、校門をくぐるとそこに行き、鞆を置いてそこから教室に通い、弁当もそこで食べ、放課後もそこにいて新聞発行に熱中した(?)記憶がある。

「上田高等学校新聞」は有料で、生徒に買ってもらっていた。ブランケット判裏表2面で10円だった。広告料もとって市内商店の広告を掲載した。だからこそみんな真剣になって新聞づくりに励んだ。印刷所に行って鉛の匂いのする工場の片隅で校正をよくした。一番よく売れたのが卒業生名入りの大学合格版で、こちらは4面で20円だった。その他、ガリ版刷りのスポーツ速報紙等も出していた。当時の写真から新聞班の松尾祭のテーマを窺うと、「論説に見る上高生の思想の遷移」とか「日韓問題」とか、結構真面目で堅いことを考えていたようで驚く。とにかく真剣になって取り組めることがあり、夢が持てる良き時代のクラブ活動であった。（追記）先日、母校のHPを覗いて部活の会員数を見ると、新聞班は何と6名しかいなかった（2016年）。われわれの時は確か20名前後はいた。おいおい大丈夫かと声を掛けたくなってくる。

○大谷文昭（65期）

残念ながらクラブ活動の思い出はありません。

○杉山孝治（66期）

私が上田高校に入学したのは昭和40年です。その年に校内にプールができるので選んだクラブが水泳部でした。水泳素人の1年生だけが集まりました。プールが完成したのが夏休み中、それまでは陸上練習と市民プールで一般客に混じっての水泳練習です。皆が200メートルほど泳げるようになった頃東北信大会がありました。殆ど全員が拍手をもらいながら最下位でゴール、残念・惨めというよりは完泳できて良かった感じです。夏休みが終わると競技経験者やら遊び半分の2年生が入部してきて賑やかになりました。2年目には東北信大会を経て県大会や国体予選にも出場できるようになり、一人は国体にも出場しました。3年生になり飯田で開かれた県大会の400mリレーで自己最高タイムが出て、チームとしても入賞できたのが最高の思い出です。氷が張ったプールに飛び込む無茶をしたり、1年生で部長に選ばれ、部を纏めようともがき続けた3年間でした。

○矢島崇（67期）

「レコかん」と勝手に称していたレコード鑑賞クラブ。たぶん私が在学していたとき限定の短期的存在だったと思います。そしてふと記憶を辿っても、あれがクラブ活動として学校に認められていた活動だったかどうか、怪しい気持ちになっています。音楽室の大スピーカーをがんがん鳴らしてビートルズやベンチャーズなどを聴いていたことくらいしか覚えていませんから。それでも音響機材の使用等についてはきわめて寛大な対応をしていただきました。時代でもあり、母校の懐の深さでもありますね。

○西澤伸志（68期）

残念ですが、私は早帰りでしたので、クラブ活動はしておりませんでした。

○北澤多喜雄（73期）

天文気象班（クラブ）に入っていました。高校1年生のころは、班活動には全く興味がなく授業が終わると自転車で家（上塩尻）まで帰り牛の世話をする真面目な農村学生でした。たぶん2年生になってからだと思いますが、同じクラスに天文気象班に入っている友人がいてその人と話すうちに休み時間や昼食時に時間をつぶす場所が欲しいと思い天文気象班に入りました（顧問は山岸という地学の先生だったように記憶しています）。部室は確か事務室を左に見ながら廊下を図書室の方に向かうと左側にあったと思います。当時は教室間の移動の際は座布団回しが流行っており部室ではその練習に余念がありませんでした。班活動で良く覚えているのは、一度帰宅し再登校し合宿所に泊まったの夜の天体観察。深夜1-2時位からの観察でしたがその時間まではトランプ班とバドミントン班に分かれ活動していました。こちらの活動の方が一生懸命だったように思います。あとは、夏休みに太郎山の頂上の神社に泊まったの夏合宿。ゲームで負けた人が毎日、下の沢まで水を汲みに行っていました。天文気象観測はやったのかどうか定かではありませんが、山歩き、勉強、ゲーム、花火と楽しい合宿でした。こんな感じで高校時代は、天文気象や地学に興味があったのですが、大学に入ってから生物関連の分野に進むことになり現在に至っています。

○濱 豊 (82 期)

軽音楽班に所属し、ドラムを担当しておりました。ジャンルはポピュラーからヘビーメタル、パンク、グラムロックと幅広く、ど下手ではありましたが、年数回の LIVE ではそこそこ盛り上がっていました。

○白石英才 (90 期)

硬式テニス班でした。染谷や東が強い時代で、大会に行くとコーチが選手を正座させて説教するのを目にすることもしばしば。我々はコーチも監督もなく、のびのびやっていました。

○渡辺 (宮原) 由実 (90 期)

かれこれ 30 年前 (!) 剣道班に所属していました。男子が圧倒的多数の中、私たちの学年は女子も 7 名程所属していましたので、何かとワイワイ楽しかったです。中でも、数日間仲間と共に過ごした夏休み中の校内合宿や秋田への遠征 (魁星旗大会) は、特に思い出深いです。また松尾祭で 1 年生が半強制的に参加させられる仮装フォークダンスコンテストや Mr. 上田などでも盛り上がっていました。が、やはり毎日の稽古は厳しかったです…。夏は汗だく冬はしもやけ、アザやまめもしょっちゅうできていました。そのおかげか (?!)、北海道の寒さにもへこたれず逞しく生きています (笑)

○中村光 (108 期)

私は上田高校在学中、硬式テニス部に所属しておりました。思い出といたしますと、一番最初に出てくるのが夏季に行っていた菅平での合宿です。合宿では、普段あまり一緒に練習の出来ない先輩方や先生と練習をご一緒させていただくのが楽しかったです。

◆同窓会本部通信

29 年度会員大会

10 月 21 日 (土) に会員大会が、314 名の参加者を得て開催されました。

最初に上田市立美術館 滝澤正幸氏 (77 期) による「ポスト真田丸の今にこそ 真田三代」と題する講演。引続きアトラクションとして上田高校室内楽班による演奏が行われました。

理事長・来賓挨拶などの後、お待ちかねの懇親パーティーが盛大に行われ、最後に当番期の 77 期・82 期・87 期・92 期・97 期の皆さんを中心に全員で凱歌斉唱をしました。



卒業 20 周年記念同期会

今年度より、卒業 20 周年を迎えた期の皆さんに、「費用の一部を補助するので記念の何かしませんか」と同窓会が声掛けをするようにしました。

今年該当の期は 95 期で、相談の結果、同期会をやるという話になりお盆の 8 月 13 日に同期会を開催しました。初めてのことで準備不足もありましたが、20 数名の皆さんに集まっていただき、中には子づれで参加してくれた女性同窓生もいてそれは和やかな雰囲気でした。

若手の皆さんをどのようにして同窓会に取り込んでいくかということが、同窓会の喫緊の課題となっており、その一環として実施したのですが、手ごたえを感じており、平成 30 年度は 96 期の皆さんに卒業 20 周年に何をするか検討いただいています。

卒業生による進路講演会

2 月 23 日（金）に 1・2 年生対象の社会講座の一環として「卒業生による進路講演会」が開催されました。講師は 106 期の矢島裕章氏です。矢島氏は大阪大学を休学し、国際交流団体「Up with People」のメンバーとして 7 か国 17 都市を巡りつつ、各地域でボランティアやミュージカルの講演を経験。そして卒業後上田市に U ターンした経歴の方です。矢島氏の「冒険に出よう！」と題した講演は 1・2 年生にとって進路の選択や学習の心構えなど大きな啓発の機会になるものでした。

上田高校卒業式

3 月 3 日、上田高校の卒業式が行われました。今年は全日制 317 名、定時制 31 名の計 348 名が卒業していきます。浪人する者もいますが、大半が新しい学び舎を求めて巣立っていきます。各地の同窓会・支部で暖かく迎えてほしいと思っています。

年会費納入者に対し、上田高校吹奏楽班・室内楽班の優待席チケット限定配布

29 年の年会費納入者に対し、年明けの 2 月初めに礼状をお出ししています。礼状には上田高校新聞班作成の上田高校新聞を同封していますが、それに加え今年より上田高校吹奏楽班・室内楽班の定期演奏会の優待席チケット各 30 枚を抽選でプレゼントすることにしました。

定期演奏会は吹奏楽班・室内楽班ともに年 1 回行われますが、毎回立ち見が出るほどの盛況であることから、同窓生向けに優待席を設け演奏を楽しんでいただくようにしたものです。

今年の吹奏楽班の定期演奏会は 6 月 17 日（日）、室内楽班は 4 月 29 日（日）に予定されていますが、初の試みにもかかわらず多くの同窓生よりお申し込みをいただき、ありがとうございました。

◆編集後記

私が住む江別では今年最低気温-25度という日がありましたが(2月2日でした)、寒いけど雪は少ない2018年冬の印象でした。しかし、2月の末にどっと雪が降り朝は連日雪かきに精を出していました。皆さんが住む地域の天気はいかがだったでしょうか?長野オリンピックから20年が経ち行われた平昌オリンピックの興奮が冷めやらない中での会報6号の発行になりました。次はいよいよ2020年東京オリンピックですね。以前、東京オリンピックが開催された時、私は7歳で塩尻小学校の視聴覚室のカラーテレビで開会式を観た記憶があります(73期 北澤多喜雄)。

= 同窓会事務局からのお知らせ =

<地区交流会中止のお詫び>

2017年9月下旬に計画した函館大沼での地区交流会は参加者が少なく中止させていただきました。現地で参加を予定されていた中西さん(56期)、長谷川さん(84期)には申し訳なくお詫びいたします。中西さんの自然ガイドで大沼湖畔を巡ることや76期の石黒さんが設計した臼尻にある函館市縄文文化交流センターを訪れるのを楽しみにしていたのですが残念です。次は万全を期して再チャレンジしたいと考えていますので多くの会員の参加をお待ちしています。

<住所変更等のご連絡をお願いします>

住所やパソコンメールアドレス等を変更したり、新たに設定された方はご面倒でも事務局までご連絡ください。

連絡先は、〒067-0027 江別市豊幌美咲町34-8 北澤多喜雄

TEL: 011-385-7023 (自宅) e-mail: tko-kita@rakuno.ac.jp (勤務先) です。